







戸乃遠旨とすが梅
香細葉とす。黄
鳥十数羽、草庵と
少しも収容す。

手も身も無れ

手も身も無れ

雨も雪も始ふさへ

詠

立石の先手
こ乃編文士の玉

立石の先手
立石の先手

レウルトカシモトヨウ

アラタガタセモル

シモツボシハナニ

ハシモトヨウ

タマトヤマミツ

トシ姉角ヒメ

アラタガタ名舟

アラタガタ

千叶 実見 政正 手本乃

廣福王府侍臣三番主蕃源實成

光

繪本左圖記三篇題目錄

卷之一

信長云賜光秀丹波國話

光秀丹波を賜て龜山の城と國中の侍大ぬるを爲す

一幕下よ属する圖

光秀邊鄙の城を表す圖

溝尾莊兵湊宇津右近をまを討圖

光秀陷麻集五年余団之三城話

光秀西丹波の村郷よりれを建る圖

麻集武郡を捕則重討死の圖

余田贋物ある家の靈を祭る圖

足利落城之圖

羽柴秀長平治西丹波詰

毎山の城合戦の圖

光秀老の坂を絶えどる圖

光秀波多野兄弟捕獲詰

門圖

八上の城兵光秀が老母を斬飛とる圖

光秀丹波國平均詰

光秀鬼ヶ嶽の城を攻めし圖

光秀雪中金山の陣を絶えどる圖

光秀赤井悪右衛門を誅もろ詰

明智大馬鹿村上和泉守埋伏して赤井悪右衛門討死圖

赤井悪右衛門討死の圖

波多野澤渾合戦詰

輝元奇計中圍勢の後を襲圖

信長云臣等改易并秀吉因刃致向詰

秀吉の復仇久間信繁を相郷村より吊る圖

秀吉多支の城を囲むの圖

卷之三

秀吉圍むる落城詰

秀吉帝叙山ふ官弦の圖

鶴羽旅卒糧仏をお潰と圖
勝須賀若款塙を行候の圖

鳥取落城之話

秀吉城中餓死の圖

秀吉落城の圖

秀吉羽衣石岩倉城入兵糧話

秀吉馬村山よお川充恵と對陣の圖

秀吉羽衣石岩倉の西城へ兵糧と入り圖

宗國秀家疏対秀吉活罪波踏征伐又城暮登城

之話

秀吉孤を秀吉み泣きしむ圖

秀吉歲暮登城の圖

卷之四

武田勝れくね士離散之話

木曾左馬公も其跡は勝れと残る圖

高遠城陷仁科又即信盛討死之話

信忠卿畠士川を渡るる遠の城より行ひ終の圖

信忠卿衆軍と勵して一番兵の圖

後方勝右衛門が妻女勇戦の圖

真田安房守昌幸曰奇謀之話

門圖

勝利郡内へ退去の圖

武田勝利又子死天國山話

小山田左兵衛尉人質を棄圖

武田信勝と尼姑勇烈討死の圖

小田勢天日山を囲む圖

秀吉塙尾兵助を石濱斗を斬る圖

卷之五

光秀の發諒信長の話

信長と瀧川一益と名馬を鳩の圖

信長と怒て光秀をお擣り終る圖

信長と惠林寺と焼絶する圖

信長と安土山眺望の圖

蘿被樹の怪異の話

同圖

信長と蘿被の腰巻を奪う絶る圖

大服僧と建部昭智靈譽上人よ法向の圖

淨土宗日蓮宗捧頤書話

日蓮宗法論洋流の圖

淨土宗日蓮宗頤書を掠め图

安土宗論の話

同圖

卷之六

安土宗論の話

同圖

真言三教

淨宗日蓮宗嘗罰之語

門圖

冠山落城之語

門圖

松田左清門尉源清國右清門と口論の圖

高松之燃水攻之語

秀吉尼郡川を掘て木松櫛を浚と圖

木松の燃水攻の圖

日幡燃合戰之語

上原右清門をま日幡六郎兵清を發砲してお殺と圖

卷之七

圓塔の燃合戰之語

門圖

惟任光秀恨信長之語

門圖

惟任光秀再恨信長之語

門圖

惟任光秀恨信長之語

光秀食豆後を令せらる族級を造営と作圖

光秀再信長を恨む圖

信長ニ蘭丸を弑す圖

門圖

惟任光秀三恨信長之語

門圖

光秀和歌を詠とふ圖

光秀の於愛宕山連歌の話

光秀坐宍登ふの圖

光秀連歌の圖

卷之八

照弓箭沽酒話

弓圖

宇都を後す光秀を詠ふの圖

宇野を後守と云ひ承光秀陣押之話

弓圖

信長の本陣本郷寺の圖

光秀龜山と勢揃の圖

村井長門守が家人光秀が陣押と名づけられ急と告圖

惟任光秀圍本郷寺話

信長婦女をみて今様を測りせばよ圖

光秀本郷寺と云围む圖

に王天又兵房孫を門を打碎く圖

信長公失を討絶の圖

矢代勝助健左郎左房門討死の圖

御所方の勇士討死の圖

小倉松高た湯浅基助中尾源左郎討死の圖

小田右太郎冲生害之話

山本三左衛門本郷守の築地を頼る圖

信長公自殺又的を終る圖

安田惟兵、秀信長公と驚じる圖

森蘭丸討死の圖

信長公凶夢之話

門圖

高野山の衆候信長公を調伏の圖

明智左馬助遠氣之話

伍子胥楚王の墓をあぐる圖

惟任光秀圍二条城之話

信忠卿走途より二条の城より入る圖

梶原松代庵が凌んで二条の城を放しとくる圖

明智治右衛門立到の圖

秋辰朝又郎討死の圖

中乃信忠卿生害之話

明智左馬久ニ条の城の天守を石撃て破りてお爲に圖

誠智小十郎勇戦の圖

信忠卿生害の圖

福田正次忠と聞く食と食する圖

卷之十

光秀軍勢宥於妙心寺活

玄方法郎兵傷殉死の圖

光秀妙心寺を自害せんとすは圖

六月二日後の日記

安芸の勝手發動の圖

明智左馬公俊移作勢図を渡し圖

面譽上人右大臣御子の遺骸と葬式法事被引の圖

細河刑部主ま光秀と絶交の圖

細河主八郎妻女を離縁の圖

卷之十一

日記之下

筒井收義浮城の圖

收義ハ岐田ヶ原出張の圖

光秀の軍宣下の圖

如上人石山の御事と用意紀ノ瀬森遷座の圖

瀬森合戦の圖

上人以下護持の圖

詮本孫六雄跋頭の圖

本願寺の圖

如上人の後室沂弘の圖

小田信澄滅亡之語

日記

志水加兵湊邊源右衛門先秀が陣へ来る圖

吉川小早川軍隊詳定の圖

る松の城合戦の圖

隆景元喜等軍隊定の圖

吉川元喜三澤為虎を喰る圖

吉川小早川のぬ廻山と柵を附る圖

安國寺惠瓊東方の陣と争う圖

秀吉京都之捕密使活

門圖

秀吉光秀が後を深むる圖

清長左衛門尉自害之活

安國寺惠瓊る松の城と争う圖

清長左衛門ひ下る松の大ねを切後の圖

秀吉草薙池京都活

秀吉諸所集て大變と物語る圖

秀吉一膝都々登る圖

懸想編次

繪本古圖記三篇卷之一

同上

信長之賜光秀丹波國話

光秀丹波を従り龜山の城を國中の侍大ね等

系向ノ幕下又属する圖

光秀遁邪の城を差引圖

溝尾莊兵湊宇津右近古まを討圖

光秀階席集尾安余田之三城話

光秀西丹波の村郷又あれを立ふ圖

麻集矢郷か捕則重討記の圖

余田監物ゐ承の靈を祭る圖

風井藩城の圖

羽柴秀長至洛西丹波詰

巖山の懐合戰の圖

先勇老の役を終立とす圖

繪本古圖記三編卷之三

信長賜光秀丹波國

夫想るゝ天下と治ふ事道あり聖て親しと教よ遠く光を明とす
常に信あり讃と公あり光と御樂を制し民と教化を是を
順とす明かに附り善と進と惡と退く勤かに附り功就りて罪と懲らし
見る人へ心と歸して天下治る故と唐虞三代の治や御樂貴界區く
引ひれ言えども信あり始へじて威あり至るゝて法を誠るの國
寔は本朝神武天皇百有七代の帝に親阿院の御宇武能光源院
義輝の附より序次而て則ちく御常治法風ほし懷乱寔に參
ス哉七道泰く争ひに至八荒圓うして私生がれ不なく王余之恩を申命
をも身ひどぞ臣として其君不弑遂君も又功臣休疑ひて其不飮とお離



ト本日守難歌をかう文の間も忽相殺とされざる軍と下皆不測の害
を免へゆること也と且運又際て、庸主も國と保せて天下に模範勢ひ
奉く云候も奴僕トは盛衰日よ夏と宋厚とよ宗うじに同身殊
害せし者幾多百より計はつて此兵亂の禦とひるゝ所と一撃
せしゆくと万民皆涿渾為水の困ひ止さむうき熟辨の狀を
貌ひかく極私とびぬる其に之を考うふを御院の御宇保元年中宣
妃美福門院の御斗として付れとき讓位にしお御院軍と慶絶ひ
源の義其子義平の御味方に事で御都の中よ兵革と勅を依ら
附の武ね平清盛源義和よ命ト終よ院の軍と附り後醍醐遷りきり
る義文と斬罪と清盛義和は歎功と達終よ平治の乱と院信教義
朝運たゞく清聲があるよ誠にね毛う清盛が威勢日ごとに盛りて
統よ其身左政大臣よ經より門憲く云卿と折その人よ阿波守
徵官とつとも汚どがうどがうどがう秋國の亂俗たゞみ況や耶國の官み於
をや此時既又國かの政綱乱とすほ清盛義和よ詔曰法宣とを仰
遷り大内に官職を剥ちのび給へや人より不改比例のも官を抜け侍
若主人の恩達かしに本曾義仲小國よ詔曰附よ平あと西海よ追下
自帝郊よ守護としがえも又暴いて悪行平あと傍うとれば海
れ朝東國よ義を辭せ大兵を揚て本曾と討平あと云玉下の
援柄を掌て括り其身通食ひかて國く守護と並て國よ被ひと
至政方悉く其家よう出がれ在て王道寛よ廣くせし家祖三代あく
甚め云び聞え山案に即時政權を奪へ其家によく政道と弊
一王すらゐても云うと時政よう九代も時へろの附よ當て後醍醐天

皇一揆にてその時と討に終ひ寔よ情く云歎一統の御世といかんとお
ども天皇嘗て昇遐してはまぬかう天下又穏かうに忠臣が退
き隠れ其人の揚げ身へらるそによう向く足利も氏朝因義貞乱と既
慶振武して勢ひを乗じ天子の日なく幽ニの王也と云ふは附
南朝北朝の二つより足利も氏小角をも後へ捕らるあ角を抜け
生々威を逞す勢ひを震ひ天下一日も保たずもあういゆきと高智の
威勢日くみ衰え十年にして終焉とてゐるの子孫お續ひて天下
の民ねふ休う政をとひしよ而徳よと名を加へよ亦れ義に正義政をせと
孔へりひて日本百余年の間に海の内を乱すととほの名成
アキと應に後の大乱としつゝはれ、荒よ壽城を開き諸侯よ同波難
きて恭平の名を聞きほさませし小田在之臣卒信長の武功よ傳う

今天の年間よりて其身帝都の守じてをきに留め安去よ城と築き
往せあひ日本の近浦候を定めて海内を征す先ホ海東と通ふも
瀬川た近浦監一益山陰通の日本修理進勝が南海道の毛頭即ち
房門永秀と陽西海道の羽柴秀就が守秀吉と陰道の惟任日守光
秀に命じて征伐せしらるひしれ今院よ天下と三分かく其三を握
強ひ威名に海よ敵ようち附天正六年の春惟任日守とて佐倉め
られる丹波國つゝへ足利氏の外石にて地侍殺まつゝも又殺み
近奉義昭と滅却のとび至りとき興とく今度汝よ家納へあひと
御刑部を捕獲るとて加勢として彼國を入國中靜謐々しらずと
食しけば先秀吉をね縛で恩を謝へれては立候（ゆ）頃内乃兵
三木余彌細河を越え文永弘日年二月桂川を渡り丹波大江山ア津



をえりてあくまで圓毛との敵を内巻八郎兵、湯忠翁が家臣内巻忠次
は三節た湯門和田安政をもてて、家内てやうじ日向守辰高圓相
終せよと河進發の衆が多きをもて、家内五郎兵湯忠翁が
去年の冬死をつゝ、親族人もこれまへようこそおまの者又百余人
流浪の仲よて在あらひの後令と掛け幕下に居ヤ度間御許窓下され
扶助は珍すよせして、雖有うべき有明智左馬外を以テアツケシ又
惟往日向の解をうじ候い即彼もよ對面お邊なく接觸石橋ゆきの
よし懸より後則龜山の懸より圓政と總勢ひさるふ圓中の士士お光
秀が入郷と候奉り侍より審より並川掃除公にミ天領馬守被陞
兵房頭と物部權院尾石と三中はを後ち酒井源左衛門守健忠酒井
加治石守守昌と勢又十倍三十倍引合し、兼向うふぞ光秀限り
ねじて其勢二千人通郷の敵を内巻先鋒者を本城中ヤラシ
當國守護職にて日向守入郷せらるの不よ一索を以ての出法又及び敵討
の旅き不不ねのまよくよく降糸と遂思益城をとておじて、奉行安法
トヨギ首やをうち小城を貞豊言てやうるの事不肖よりども通會の
軍長利左馬守氏清のに男後井田節儀奥主代の後流を未未だ名を
獄をどる少今之敵よ圍うてよりて降糸せんゆうきの忠厚よりうじ
矢筋村けけて候く討丸く先祖の名が清くみどりひととて彼譽
の譽大切腰刀と奪取と門知(退出)うち小太刀在馬伏すよ始つその儀



溝尾
莊共清
字は右近
を詠づ
圖

なうが真喜の軍を遣せとて日よ闇を邊お捕竹束を密並へ叫き鳴る
夷アラクを燃ゆて火薙て期して幸かし城を圍めり一族後弁と
市政監同志を勧左近將兵の手を失なれば大々の擣よをアラテ指若引浩
さんズミ村の役より生て至し事との軍兵を廻死人數をもじ甲も胄
も付徹れ攻はば也引退テ遠邊にてぞ居アラクは財光秀より援兵と
シテ細河刑部を請爰る妻本を計院松田を節た清門溝尾庄兵清等
五百余人をひの丘ニ相加テ軍議詳定ナラク小細河爰るヤラクを欲
今候なる小城ニ猪築テ味方の太軍と計更戦んともろハラ招を邊乃城ニ
ハ麻部宿ニ邊守津の兵士後活せんどリ什策と差す之欲ニ後とつま
シトハ要らむんとて細河刑部を請溝尾庄兵清松田を節た清門等を
勢くと到着して敵の東アラク勤に埋伏ヘ今やくと待取る者る
宇津の城を守はば近幸矣友宗福井因職もと勤て心を合せ玉に後活
の勢とあハシカ物事あレシテがに百隼人をも卒邊郡の城の後活アリテ
時アラクがお来ヤクテ今日の往亡月ツシハ役ニ吹矢射出陣に立つて
候ドヒと傳ひ立るふをもまたハ如ア行來アラクのあゞぎや味方のア
ヨコ月ナラハ歎も又見岳用の舌ア勤て軍卒と迷ひアラクと
とて自ナム先よ馬と出ア遇鄰にて意アラクの邊郡の城今七八丁よ
一と云て源ア小川の流ミアホトヒアレハ勇ヒモリヒテ敵の伏兵二日
よ詫ア後炮とおけまと處構尾庄兵清先をよをもし餘とよて阿キ
東ア右近をまサ卒を勵ア歎の伏兵行役のアラクアヤ打破く通ミ
やと自身餘と捨て廻されが軍卒もよ勵アシ小川の流ミアホト
南ア追ア背く丈(残)アラク財よ細河爰る松田を節た清門東アラク

のとく押来り横塗にさほが傳へ安らげ客よゆひく字はが軍
勢さんぐよわなれし小をみて刀をうちふび溝尾庄兵勝得うちじに
と喰て廻へる處よあつて残すぞ右をまよおち死きて溝尾と餘
を合と双方はあら別兵うねば下た右遙ろるく勇と震ふく宴合
うがうち降ぎ武運やそぞうと誰が放つともかく後炮右近をまが内
堀よ中つて衆馬よう逢ふ席て紀づらみとお既よ討されば其ゑは
卒右往左従又教亂討る者數をそぞ降系もろ者守つてある
清寧津の城へぞ迎ゆく取八麻郡の城を波多賊中勢率すも遙勢の城
般へ也と其氣をもぞううるがうち降左をまうが討とすと後活せん氣
勢もぬけ城を守つて新居つゝ去後よ遠郡の城みりあらの勢次才ふ
争うれき思ひ後活のを齒お邊られど今ひそまでくとて10月廿九日
已の刻計の城戸押しよせ八十磅打て出槍五十六く數くよ姓名と名
のうち勢の中(案)て出死よぬく勢すうる城兵勇もと下どもあらひま
勢へ船へに方と聞く號の額よ二十疋(號)討記城中(引)へんとどうを
明智活左衛門(亮忠)さじくやかれて付くよせよや者どもとて先よを
みけよぞ遣兵三百鎧斗馬奈よに槍矢拵く喰海うる城兵へやと
せほと三度にみだ小じよく追拂しきどもあらの猛勢矣くと
附て宴休切を慕ひうるふ城兵門を団るのとてぬかくあるもれ
ひた唐門(本村)八兵溝等(修)刑部右衛門を寃夷の兵士十全卒をノ城
戸を立(如)く戮ひ清討記をしてうるけめ脱よするの大軍明智たる
久御刑殺をま松園を即ち清門構尾庄兵勝に至天領馬守秋もくと



丸ノやをの橋（や）に大と附（付）て附（付）れが軍（軍）に方よどび走煙（煙）をやみ登る
依（よ）く大ね猿井周（周）守貞政（貞政）お佛（佛）坐（坐）の巻（巻）隨（隨）妻（妻）と利敵（利敵）其子（子）も
股撥（股撥）切（切）て文（文）の病（病）と済（済）すが光秀（光秀）も既（既）び奥田官（奥田官）を乞（乞）は城（城）を立（立）せ
軍（軍）をまどり龜（龜）之（之）を立（立）され

光秀隨庶集軍算余田之三城

惟任日向守光秀丹波（丹波）國（國）を従（従）入（入）國（國）して毛と忘代（忘代）せんととく小東丹波
従（従）よ平治（平治）せるとくども一郡（郡）一城（城）よあて兵と集（集）ら爲（爲）てひ國（國）を光秀
又欲對（對）焉と計（計）る者（者）いくぞくと教（教）をもとび其中（中）より人金（金）を引き
構（構）つて若城（若城）うり野口（野口）の城（城）ハ庶部（庶部）の城放（放）庶部（庶部）の城篠（篠）の城莫（莫）の
城後智（後智）との城後智（後智）の城水（水）との城ハよの城毛（毛）の城毛（毛）の城ちんとの要害（要害）とまで
殺（殺）く股（股）せんと依（依）く光秀（光秀）たて勢（勢）アリて毛（毛）く踏崩（踏崩）レ微塵（微塵）よほして捨（捨）じ

先龜（先龜）の属城（属城）毛（毛）庶集（庶集）余田（余田）の城（城）どもよう従代（従代）せんと内年三月十日
冬又百金猪（百金猪）を了（了）率（率）ふの兵（兵）よ歸陣（歸陣）一先毛（先毛）れと毛（毛）て勇威（勇威）と毛（毛）を
其文曰

先秀齒圓（秀齒圓）の守護職（守護職）にして龜（龜）の城（城）よ左城（左城）と毛（毛）庶集
余団（余団）之三臺者（三臺者）従右（右）よ龜山（龜山）之幕下（幕下）也徒歟今龜（龜）と下（下）
知（知）を不交（不交）矣今度（度）退治令發（發）の者也役（役）亦又知（知）くも
即時（即時）敵軍殺（殺）か（か）べき同鄉（同鄉）々材（材）て底（底）者乎且居
武者（武者）と討（討）え城（城）毛（毛）首（首）捕（捕）者（者）ゆひてひ石其（其）下（下）一族法
大毛首（大毛首）毛（毛）百石永代可（可）完（完）於（於）令限毛（毛）者右（右）毛（毛）無（無）人
毛（毛）死（死）り者（者）ハ職（職）大善薩（善薩）お遠（遠）毛（毛）同義者（者）也依（依）る

天正六年三月十一日

惟任日向守

奥丹波諸士名主百姓中

とぞ書たり。又は麻集の燃え麻集が邪か肺則重ハ一族諸臣を
抜き相候てやうる。今度光秀發而よ能て先一轍より是井次より余
田山城より事奉し。不治考より後勢り。三城とも又滅亡し。且、我
年正安に一隊の志を盡くせらる。其財を支拂ひ。トト澤喜龍あへま
井の滅び族き真改よ力と合せ渠と生れを絶ゆ。且、我の歎止そ
カと限り。湯ぎ歎ひ候く討死。近いと勤じる。少ぞ財を失ひ
喜龍も又の食に消き。又は葬として葬き。色や滋よ義にて
て恐れ勝ちの謂く。又は死よ別と義のぬよ死せん
れ心の裡つふ名あゆゆと云々。兵卒まで禮の禮と後ろ
斯て別を今いゆ。其の年もは明日の歎あ柔じ。今や酒宴にて

今度の歎をせんと死よも。酒宴うひ衆てをあじ。う
明延十二日光秀が先陣明智左馬友光を又百余萬麻集の燃へ
押よせ岡と地つて夷す。又は城や。も因ひ没け。幸づれども。墮つ
じ後地を石を救う。逃げて。方哉。又は則を。がおほほ。まを
十郎とも。割の者を食へ。騰て大馬に。やうり。考の太ね。左馬友
光を食ふ。とこそ。又は。城中後あう。今知る。酒宴と。傍。酒いき
余り。かと。ども。者の縁て。ト。宿よ。酒。の首。縁て。きて。一盃の興
を。贈。へ。う。か。ゆ。の。麻。集。を。劫。膏。則。き。が。良。等。足。立。奉。十郎。又。是
そこ。を。持。ふ。ま。う。ひ。と。又。十。磅。計。をして。又。百。金。錢。の。其。中。一。錢。連
く。切。て。入。經。模。よ。募。う。脇。遠。よ。斬。や。秘。術。を。匿。歎。い。が。姦。勢。か。ん。
力。竭。引。出。く。一。人。も。浦。に。刺。ち。ぐ。く。ぞ。死。く。ア。ト。則。き。二。男。助。



節虎を遙よりとて一族を殺の君は十九人二のれよう討て。勢
の捨食帳へ一文字よ細り入虎を兵よめひて下る。勢
の勢の中へ小勢のひくへるに皆くす揃ひせらる。馬の足を蘿
例へる處で討死せよと一石を為て切らし。身も口も手も脚もされ三五
計を下さる。討て敵兵十人に討死。又虎を殺も討とて首二三
よほくぬき。敵兵ふくして首擱く。敵中へうるい勇じくもう。勧ま
虎を不對面今ハ廻とこそ。是れり今やく御自害の因と勧ま
則重きとて。敵よ徒かう。勿法るとも死せず。斧うちの歎一人
しもかず討多く死せん。こそ軍金固のを助たる。以僧面くりて
又斬死しゆくやと。長刀を小股よ捲込。更後七箇方に八面密
戰し皆討死し。下さる則重き。身よ樹枝ね十本。恩も終へ
えられば引退き。自害せんともうふと歎三箇。死ちて終其不
よ討とさり。其後此所の郷民も舊君黨下の餘恩と報びて
てけ敵に一弓の効社を經營。彰ハ賊とぞ崇う。此明キが先祖
を向ひ三行守源危和の三男。貳毛の本孫。子代。け不の父
アリ。明日三月十三日。惟任物教。又誅金固の懸。押寄に方と圍で
取うち。敵を禽。金固の懸。既に。士卒と勵。防戦。處。敵と之
び。出。勝敗。三三人。討死し。大ね監物を。供奉。懸。中と處
谷。金固の懸。主事の懸。既に。敵の太勢を。下へ付。追走。ひ
基急。監物。今ハ力なし。とて三々。防戦。村を。其。懸。よ。兵の頃。又
とう。太。ち。る。岩の。と。て。壁。壁。よ。獲脱。捨服。十文字よ。捲切。て。絶。よ。壁。

余田監物の
鹽を多う國



く處に至る三人の勇士を人の貞室寄り軍事のとがち方引接てゆてより
私軍の中より討死にして至らる此碎の岩は墮物岩と呼んで小祠
を建て今もれ三月十三日村翁里姫石表してお乳と狹石より
せりやまねの惟ほ勢衆集余間のあ處をとめ候民威断くと震
望十日に足安の近辺まで押寄せ隊中軍後を三明日合戦下船し
き有物處十日日のよ天より漫漫（押送後砲と放うちと村の裏を
もしこだ夷す）とては城の大内は延年刑部少卿古政一族良後八百金人
堅紀と元節にて御さしれがあるの太軍十日日のよ船より十七日の晝
まで火あいをして攻め（とどまつては城せざりて其夜の刻）
雨を傾きて陣奉り雷電轟發するゝめき雨陣張ひとじめ
ゑの晴れと結局ては城兵を食三日即ち安とて者俄よ遠征
城中よりを放ち門を開き敵を引く（あらゆる軍兵我を）と雖て
當ろ者と切劔せば城中より下（と）撃勵爲め者大まき大内刑部少卿
古政卒たるをくげあくとまと力をまとと恩へ自害せんと見附よ
奈良縣卒共湯とて厚下傳までやうら今も城端とすもお華む勇
うきこわいに家とてそひを活つて保きよ壁うけに發きよ絶壁の方
（も）も爲め活ひきて計謀をほりともめらふ古政少尉もと思ひ
てや一族妻子十人引き雜兵よりまづて鉄門發ぎ小城を出城
の處の外とて死滅（城を傍れて）爲めて更びく月日をやうらを
惟任勢一日よ城中（死に）へんぐよ羅されりみゆ者一人もゆく
將附よ敵と參立て本陣（築者を）勝軍と若くうる

羽柴秀長平賀西丹波



風井
蓬萊
の圖

此日守光秀は山の陣面にあつて勝軍の次第をとらば
は勢ひよ奥丹波と夷嗣としと西勢時の城押よどふ城主村
上和水き城戸を開いて光秀と連携で幕下をもつ光秀これと
免へる石をなわせばれりて八幡郡放麻郡と改め
まうる木の城よゑくし城主内義昌向守防護ひと據え奉る
其次陰山の城押安夷アリをもつ城ね陰山源吉兵満又百余名を
切て出光秀が先とそんじよ切立れど一隊の士勢へ智と戦ひて少
不休討死と其の次朴との城主と出勝ひとも叶ひず歎ならうと豈
妻のこゝに判殺へ八十人に切て忠のまゝ小戦ひて毛利討死
アリテ其かの處の城園の城皆墨く爲城と云ひて是に先秀が
威勢丹波一画の震ひ不日して平定の功を全ふとしとよ下とうじ
勇みうる家よ門圓篠との城よ荒木兵部主備とる強勇の兵士六
百余人捕獲するが足守七人妻と勇武の者とて行より近郷要害の
地よ岩谷構(ちよいが)築き壇石池じよお助て城ノ内に光秀ひて
押安先を城の上方を用ひて攻城よ悉く軍勢をからて是と押安
後邊よく妻タレども元来城の要害を堅固なる小城ね荒木兵部主備
双子き勇すれど後ひ兵卒皆一人當ふの者だなしにても恐れど矢石
を飛(と)令丸とねらへて防戦もつゝしがちと負死不敵事ありて
た右ひて攻あひぐも刀をうちる剣(けん)をもよ構ててふれずの事す
或のけつけスハ初は因ひもううざひ石を打ちて打ちてうちくちじき
を討ひ彼方よう切て出彼と防げばよし仕事にもの光秀政や
んでぞ力をよろる也る小兵四十日の夜七ヶ所の城くようお寄こ見

鎌山城
合戰の
圖



えく狼烟えくをの方へ一射す宴を出先秀吉は二陣たる
軍を切崩し勢ひよゑて殺其勇氣の劣て報せ又向
戦ひて車陣にして近づき先秀吉本の勢よかてまへ武
士とおもてまとの様よあれま山ね監三百余人先秀吉旗本
(援合)よ嘆て然うさんとよ戦つて荒木が軍勢是れより
勇と逞あし先秀吉討ゑんと八方よう揃えられ先秀吉軍勢當
國へ郊せうり築りくびく烈き戦ひをひだ丹波の者若と
小畠の吉く恩の居よけ合戦の歎きふ途方と先ひ老の役うる
頃の通をぬり亂さんとよかくおおなづらまほしそ退奉の軍
勢恰も鷹の浪を効くとて御馬守長門守
郊外溝尾庄兵秀明智光馬久等殿へし合せへ難く治よ過軍

御よき退き大内秀吉も隣て近づく荒木一統まゝの監兵
追討もそまでぞと晴闇を三度揚げ時軍勢をもとよし合戦先秀
吉討え者七百余人在貢者其數をもとじ遠く龜山に到る先秀
吉ひよお負せり口晴さゆに因ひてハ征伐をもほとし信
長云々接兵兵乞ひよ依て足利又即ち清門る計も甚三郎清河仰著
守中河勢平る山右近き一万五千兵及び織田口より進歴先秀吉
とよもかく歌を討へとよかひよけひ野本義元もよもかく
三本の歯とえ圓も遠夷下て將ひ合戦をめざし幕下の武士をも
西丹波を押へて勝てて元も先秀吉とてもあらゆる功を立じ
とゆやかくおれりが秀吉を慕ひ天正八年又月廿六日合戦オ小市即ち秀
長を大ぬとして丹波丹後圓も越後の降人松田操漢也小畠源兵馬也

出石源左衛門 松原七郎左衛門 丹波次郎左衛門 小野木雅樂 長
谷筋左衛門 伊吉義重 桂橋是永也 丹波とて其勢都合に余
勝西丹波(丸)と日光秀も龜山を出張 奥丹波(押)あら竹中砲
紫勢西丹波(小)か長次か 許太郎 丹波(大)が龜(大)の城を攻めし
あよとんで綾部の城(福知)の城を夷て破るを謝外水(水)の水
へと押よどりふ水との城を破多岐(大)を及(大)守(大)は名(大)守(大)を
すま金崎(大)と八幡(大)と不生張(羽柴)の勢をま(大)然(大)羽
柴方(大)要(大)震(大)と武(大)と(大)欲(大)身(大)と極(大)る孔(大)うひ(大)
先陣(大)の兵(大)さん(大)ぐ(大)密(大)弱(大)侍(大)の伊(大)吉(大)義(大)をま(大)小(大)國(大)但(大)る
小姓本國書(大)賜(大)る先(大)阵(大)の者(大)悉(大)く討(大)犯(大)と且(大)辱(大)を受(大)る者(大)教(大)と
ら(大)寔(大)三十日(大)討(大)陣(大)一(大)六月(大)九日(大)八幡(大)と(大)兵(大)あ(大)萩(大)越(大)六
丸(大)秀(大)門(大)が居(大)城(大)萩(大)城(大)の城(大)を一日(大)の事(大)廢(大)城(大)ね廢(大)じ殺(大)百(大)人(大)を斬(大)裂(大)
次(大)又(大)と(大)氣(大)く(大)登(大)り(大)城(大)と(大)中(大)よ(大)え(大)ら(大)炮(大)を打(大)け(大)矢
を放(大)ち(大)て(大)攻(大)き(大)い(大)ふ(大)長(大)宗(大)貞(大)徳(大)よ(大)ひ(大)く(大)八(大)幡(大)と(大)引(大)退(大)き(大)
の城(大)逃(大)ひ(大)ぬ(大)依(大)え(大)秀(大)長(大)軍(大)勢(大)國(大)中(大)に(大)れ(大)と(大)教(大)て(大)放(大)火(大)妨(大)撃(大)
よ(大)あ(大)ち(大)ひ(大)れ(大)秀(大)長(大)威(大)名(大)ス(大)丹(大)乃(大)の震(大)ひ(大)日(大)向(大)也(大)秀(大)け(大)便(大)
軍(大)を(大)立(大)奥(大)丹(大)波(大)向(大)ひ(大)る(大)今(大)度(大)秀(大)吉(大)援(大)兵(大)西(大)丹(大)波(大)う(大)妻(大)
速(大)み(大)功(大)を(大)立(大)れ(大)と(大)え(大)ひ(大)秀(大)長(大)て(大)つ(大)ち(大)再(大)び(大)番(大)と(大)相(大)つ(大)
軍(大)少(大)と(大)お(大)困(大)と(大)經(大)兵(大)急(大)と(大)攻(大)き(大)り(大)荒(大)木(大)足(大)す(大)と(大)參(大)と(大)う(大)櫻(大)
祝(大)御(大)猿(大)賀(大)山(大)廻(大)し(大)度(大)く(大)敵(大)を(大)討(大)ひ(大)追(大)參(大)し(大)も(大)あ(大)限(大)う(大)き(大)
勢(大)う(大)ひ(大)経(大)よ(大)呼(大)り(大)え(大)方(大)六(大)人(大)討(大)ひ(大)三(大)男(大)荒(大)木(大)山(大)櫻(大)を(大)捕(大)う(大)
秀(大)え(大)降(大)條(大)え(大)う(大)と(大)血(大)と(大)う(大)う(大)ね(大)ま(大)う(大)探(大)より(大)と(大)碎(大)の城(大)

光秀老の坂
を絶えども圖



無の城細村の城を因みて城と云ひままで後述終はとの城と云
聞く事ともにござりて政体ろけ城と蘿太ね波多時右湯門を浦秀
治金寺をつる秀尚老臣河村助右湯門浦桑市右湯門夏田至
清松田少兵清等の勇士より余人堅固の蘿城にて之え
東山城修祖の要害みて先秀が大軍を用いて攻めても矢に傷
き手足ちく近しく城を詰めて皆く財物と賄うけ而紫小市節
秀吉水との城よゑ越す合戦をゆらさふ城を收多岐と駿河家
居城水よて捕獲し嫡子英治守宗貞又百余人を率て下表乃
要害をわて出羽紫井が先陣年を條加守は監物を討ち下の城引
ひく羽柴秀長を許のねび歎と討も大よ鳴り下の城と千を二千
重ひ左団と左衛門と分ば夷く下の城と波多殿宗貞不倫翁城付
は」と因ひて「被笠船の酒宴をも切扱して配」うちれが當城
の主久下誠後守重氏一族度は雅禾家を所有し宗後の者た
の城城よゑ城内に烟の内よ配されが兵をもく城と近づく海邊
又立候江戸の城底邑としれが秀長越軍を承るとの城と云候城
砲がおけろが侵者を宗長と渾身をもととども宗長
ととが西昇波と教代名を得良ねうしは進勧に返送重す海邊
を様よりて焼落とて其をもととて城が廢りく紫
よ蘇らるまよびきとて然して敵のねよ笑ひまんもに晴とく
一族十全人諸もよ後接切て墨にうれしめぐらす二郎又郎多
田内兵長右院山治右湯門をもて出く敵と一組皆利遠て討死と

家よりいへ西丹波あくに山院さんひが五ね小市郎秀長三
本の合戦も心えゆくはす一と安田へ往て丹波の渡をねひるいと
信長は感づかひよ速丹波を引き摺りを見徳(きは)作清
弘徳(こうとく)て小市郎秀長兵分丹波不くよあひ摺りの陣(陣)を

繪幸吉圖記三篇卷之一終

